

川越市立博物館



博物館だより

創刊号



発刊によせて

教育長 村田 和 男

「親しみやすくわかりやすい博物館」これは博物館準備中から開館後も当館のモットーとしていているところです。

開館し8ヶ月を経過したところですが、お陰様で予想を上回る14万人を超える入館者を迎えることができました。これもひとえに市民の皆様のご理解、ご協力のたまものと心より厚く御礼申し上げます。

さて、この度「博物館だより」を発刊することとなりました。これは、博物館の仕事を市民の皆様により一層ご理解いただくと共に、博物館や文化財に対しこれまで以上に親しみをもっていただき、皆様と共に博物館を運営したいという考えによるものでもあります。

市民憲章の中に「郷土の伝統をたいせつにし、

平和で文化の香りたかいまちにします」「教養をふかめ、心ゆたかな市民として活力にみちたまちにします」とあります。これを博物館活動に照らしてみるならば、“市民と共に文化財を大切にし、公開する、そして市民と共に川越の歴史文化を学び、語り伝える役割を担い生涯学習の推進を図る”ことではないかと考えます。

そのためには博物館においては郷土川越に関係する資料の収集、保管、展示公開、教育普及、調査研究を積極的に行わなくてはなりません。今後この「博物館だより」を通して、これからの博物館事業が推進され、市民に一層親しまれ、わかりやすい博物館となるよう努力いたす所存でございますのでよろしくお願い申し上げます。

こんな博物館を目ざしています

館長 黒川五朗

教育基本法の第2条において、「教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、实际生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛を協力によって、文化創造の発展に貢献するよう努めなければならない」としています。

今や地域博物館は、この教育方針を実現するためのうってつけの社会教育機関といえます。

博物館こそ、地域における地方文化の創造と発展の拠点をなす文化施設であり、単に文化の殿堂としてでなく、歴史文化活動が展開される場であるとともに、都市計画、観光行政全体の中で、たしかなかたちで位置づけられ活用されていかなければならない重要な存在です。

川越市立博物館は、このような背景を受けて本年3月にオープンしました。

建設にあたっての基本理念を、「郷土の歴史と文化に対する理解と認識を深め、生涯学習の要となる施設として、市民が将来のくらしと文化を創造するに役立つ博物館」に置き、親しみやすくわかりやすさを強調しました。

近年、人々の興味や趣味の欲求は高まり広がっています。したがって、これからの博物館は、従来の「もの」を中心とした運営が求められる反面、市民各層の幅広い学習に対する要望や一般的興味から、レクリエーション的欲求に対応できる施設であらねばならない時代となってきました。

来館者すべての方に興味や好奇心を与え、意識をはぐくむ場が博物館です。自分自身で学べる自由な場として、それぞれの利用者にあった利用ができ、学習の動機づけとなるよう配慮さ

れなければなりません。単に資料を収集し、その資料にともなう調査研究をし、成果を展示に生かすということにとどまらず、「もの」を離れて、あらゆる面での教育普及活動をもとり込み、市民に学習の場と機会を提供しながら、知的欲求を満足させる場であらねばならないと思います。

当館は、こうした人々の欲求や、社会の要求に応えるために、川越らしさと特色を前面に打ち出した展示とともに、地域住民に支持され、市民との結びつきを常に意識した事業展開がなされなければならないと考えています。

これ等の実現には、特別展、企画展はもとより、講演会、学習講座や日常的な普及事業をはじめ、先人達が残した数多くの文化遺産をもとり込んだ多様な事業活動、綿密なる調査、きめこまやかな運営が必要とされます。

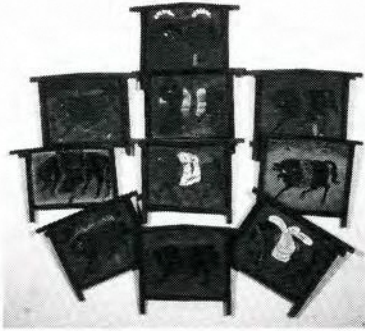
また、学校教育との連携はもとより、公民館、図書館等社会教育機関や歴史文化団体等とも手をとりあい、トータルな運営を心がける必要があります。

従来の「博物館」という古いイメージから、郷土川越の、今や時代の先端をゆく映像・ハイテク機能を備えた川越市立博物館が、情報機能をフル回転し、研究、蓄積された生きた情報を提供する機関として、市民のみなさんの生活の中に組み込まれ、幅広いニーズにお応えできるようになったとき、博物館本来の姿となり、そこに、「精神文化」と呼ばれるものが生まれるのではないだろうか、と考えます。

これからも、市民のみなさんのお力添えを切にお願いする次第です。

川越の小絵馬

山田 祥子



川越市内の絵馬については、川越市文化財調査員の手により、昭和62、63年に悉皆調査がおこなわれ、神社53ヶ所・寺院9ヶ所・その他地藏堂など6ヶ所に絵馬が現存しているのが確認され、全体で500点余りの絵馬・奉納額が存在が明らかになりました。市内の小絵馬も、この調査で27ヶ所の所在が報告されています。

小絵馬の絵柄で多くみられるのは、礼拝する姿を描いた「拝み」や、「め」を向かいあわせに描いた「向かいめ」です。笠幡の個人の宅地内にある小さな薬師堂には、「向かいめ」や「拝み」が奉納されています。薬師は病気を治癒する神様として広く信仰されていて、とくに目の病に靈験があり、眼病治癒を祈願して「向かいめ」の絵馬が奉納されました。ここの薬師堂には、かつてはお堂の内部や回りに小絵馬が打ち付けられていました。現在は取り外され、そのうちの75点が所有者によって大切に保管されています。

的場の八坂神社にも、本堂のわきに薬師堂があり、多数の「向かいめ」の小絵馬が奉納されています。堂内には現在も数多くの「向かいめ」の小絵馬が打ち付けられていて、瓦製の「向かいめ」もあり、薬師信仰の篤かったことをうかがわせます。

中福の三国馬頭観音は、馬の神様として広く

信仰を集めていて、今は新しいお堂が建てられています。かつての古いお堂にはびっしりと馬の小絵馬が付けられていたそうです。現在も、そのうちの数十枚の小絵馬が残されていて、奉納者の記名を見ると、中福村を中心に近隣の村からも広く信仰されていたことがわかります。

また、「地藏」の小絵馬がしばしば地藏尊に奉納されているのがみられます。喜多院の苦抜き地藏は、現代の合格祈願の絵馬掛けの傍らにあり、昔ながらの手書きの「地藏」の絵馬が奉納されています。同じ図柄の絵馬が、砂新田の旧川越街道ぞいの首切地藏に数多く奉納されています。この地藏尊は川越藩の刑場跡の近くにあります。その供養のために建てられたものですが、その後も広く信仰を集めていました。

こうした小絵馬は、手書きで古くから同じかたちです。川越市内では、久保町の神具屋で、今も、手書きのさまざまな絵柄の小絵馬が売られています。この店で買われた小絵馬が広く各地の神社・地藏堂に奉納されたようです。

現在の調査ではこのような小絵馬が確認されています。しかし、小絵馬の性格からして、まだまだ多くの小絵馬が市内にもあると思われる。小絵馬は屋外に奉納され、風雨にさらされているので、朽ちやすく色褪せた状態におかれているものが多くみられ、忘れられている小絵馬がまだたくさんあると思われる。

小絵馬は個人が日常生活のなかで気軽に奉納することができ、庶民の切実な祈りがこめられているといえます。現代の小絵馬が合格祈願のためにさかんに奉納される一方で、本来の手書きの小絵馬が連綿と奉納され続けています。時代が変わっても、絵馬を奉納するという行為の根底にある人間の祈りの心は変わりません。

写真展

—明治・大正・昭和の川越

小林 誠

特別展示室では、7月28日(土)から9月24日(月)まで第2回企画展として写真展—明治・大正・昭和の川越—を開催いたしました。

近年、写真の資料的価値が高く評価されるようになり、古い写真は歴史の生きた証人と言われています。それは、写真を通して当時の人々の姿や生活の様子をありのままに知ることができるからです。今日では取り壊されてなくなってしまった建造物、商家などの町並み、古い昔の校舎の様子、人々の服装、暮らしぶりなどそこに歴史の移り変わりを見ることができます。

写真術は、何時頃日本に渡来したのでしょうか？ 諸説がありますが嘉永元年(1848)、ダゲレオタイプ(銀板写真法)のカメラ一式がオランダ船によって長崎にもたらされたのが最初だと言われています。フランスのダゲールの写真技術の公表(1839年)からわずか10年で渡来したことになります。

では、川越での写真の普及はどのようなものでしょうか？

明治13年頃(1880)に、久保町に佐々木信三が県内で最初の写真館を開きました。また、明治35年(1902)には、仲要次郎が志義町に那珂写真館を開業しました。この二館の撮影した明治～大正期の写真が市内に多数残されています。明治末期頃になるとアマチュアカメラマンも見られるようになりましたが、カメラはまだ大変高価で写真は今日のように普及しませんでした。

大正期に入ると写真館の数も増え、市内の各書店から写真絵はがきなども多数出版されるようになりますが、カメラが一般的に普及し始めるのは昭和に入ってからです。

今回、市民の皆様方からご所蔵の写真を提供

していただきましたが、特徴としてはアルバム類はごく少数を除いて大正末期以降からのものです。カメラが普及しだし、いわゆるスナップ写真により建物、町並みが撮られるようになるのは、大正末年頃から昭和初年にかけてのようです。したがって、明治末年～大正初年のものは市内の書店から出版された記念絵はがきが多く、この中に町並み、市内の名所写真などが含まれており川越の昔日の姿を知る上で大変貴重です。

展示品の中で一番古いアマチュアカメラマンの撮影したアルバムは明治末年～大正初年のもので、医師であった方が撮影したものです。この当時カメラは非常に高価で、一般にはまだ普及していない時代でした。

展示写真の中では、今回新たに見つかったものとして時田醤油店、喜多町の荒井桶店の店舗写真があります。今日ではなくなってしまった往時の建物を知る上でも貴重なものです。

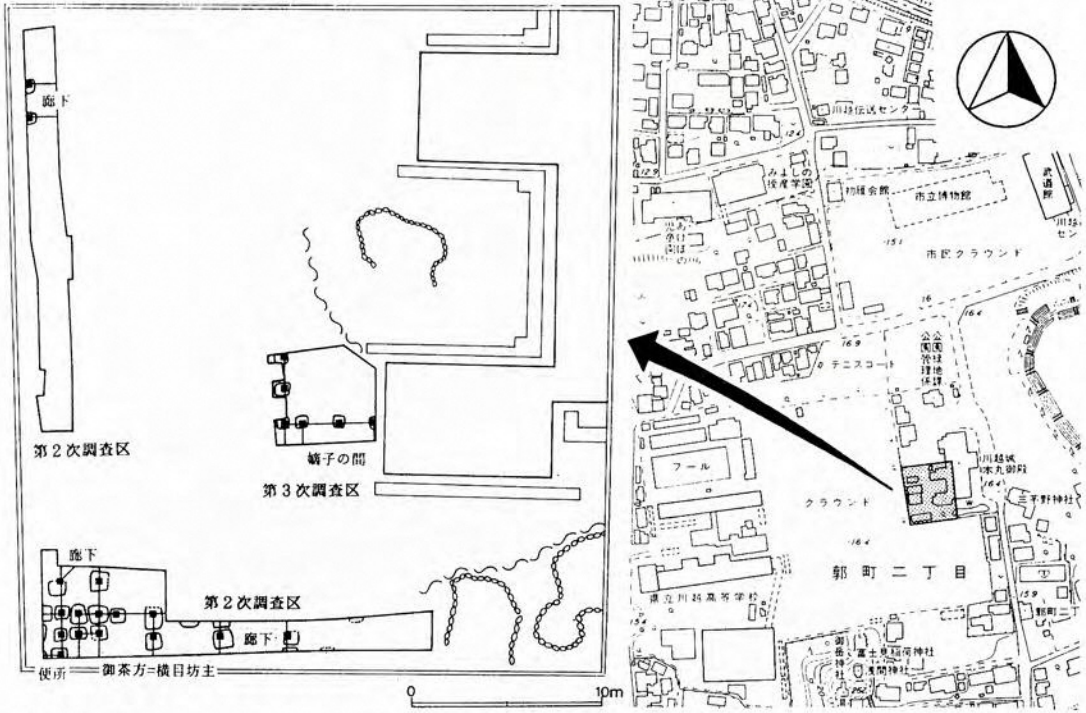
また戦時中の資料として、国民第二学校(現川越小)での軍事教練風景など、当時の様子を知る上で興味深いものです。

クラシックカメラは乾板式のリリー手提暗箱を始めとして、国産、外国産(主にドイツ)を中心に代表的なカメラが揃い、特にライカがI・II・III型と6台展示され、鑑賞に価するものと思います。



川越城本丸跡の発掘調査

岡田賢治
天ヶ嶋岳



はじめに

川越城本丸の第二次・第三次調査は、川越城本丸御殿の周辺環境整備に伴う配管・配線工事に先立ち、平成2年5月から行なわれました。「川越城本丸」の調査は、昭和64年1月に行なわれた第一次調査にはじまり、今回で3地点目になります。今回の調査も含め、今後の調査によって、川越城の往時の姿がより一層明確になるものと思われます。

川越城の立地と歴史

川越城は川越駅の北東約2.3km、入間川右岸の洪積台地上にあります。城を乗せる洪積台地は、伊佐沼などのある東側の低地部にむけて傾斜し、水田面との比高差は約5mほどです。

川越城の築城は長禄元(1457)年、上杉持朝の臣、太田道真・道灌によるといわれています。現存する本丸御殿は嘉永元(1848)年、松平齊典により建てられた御殿の一部です。

調査の概要

本調査では約120㎡(第2次調査区100㎡、第3次調査区20㎡)を調査しました。その結果本丸御殿の柱穴址30基(2次-24、3次-6)、古墳時代の住居址8軒(2次-5、3次-3)にものぼる遺構が確認されました。なかでも柱穴は規則的に配置されており、往時の間取りを留めています。古墳時代の住居址はカマドが残るものもあり、完形の土器も数点ありました。

まとめ

今回の調査で確認された柱穴址は、河原石を数段に積み、粘土を混ぜて突き固めた、頑丈なものでした。このことから荷重の大きな建物を支える基礎の部分であると考えられます。

小仙波町の光西寺に残されている川越城平面図と、今回検出された柱穴址を比べてみると、便所、御茶方、横目坊主、嫡子の間などの部屋に当たることがわかります。

平成2年度 行事計画

月	10	11	12	1	2	3
企 画 展	9 「指定文化財展」		2 18 「収藏品展」	26 26		10 19 「幕末の川越と 周防守展」
講 座		17 29 1 8 「川越歴史講座」			24 2 9 16 「機織講座」	
体 験 学 習 室		1 「はかってみよう」		20		19 「着てみよう」
子ども博物館教室	13	10	22 23	19	16	9
野外博物館教室		21 28	3 4 18			
ギャラリー	1 「子どもが選んだ文化財」	25	1 「郷土川越を描く美術展」	20		

資料寄贈者名簿

敬称略 順不同

55年	中台自治会 時田里司 構溝奥右衛門 平野光次 滝島徳重 東郷博 筋野良平 内田光雄 佐藤俊樹 正木敬子 岡田治男 實浄文彦 戸田君子 松島清蔵 染谷 潔 栗原恵治郎 小山文平 森脇三枝	戸田 静 金子 きよ 本沢作兵衛 鈴木喜三郎 村山昭二郎 国田福造 長島久雄 神山 実 神山 潔 神尾 茂 香取 初枝 神田 寿雄 犬竹自治会 忍田 実 安斎 利夫 田中カネ 岩崎 清 近藤 充	59年	栗原恵治郎 上田さつき 西村兵助 小杉太郎 新井光一 南田島自治会 下老袋自治会 新井泰司 矢島 忠男 今平正男 本沢作兵衛 武内喜久江 高松照矩 小菅善吉 山本 肇 坂本まち子 菅沼 幸一 細田長栄	大沢まさこ 大河原芳郎 山田勝郎 生田千代 吉田長寿 関根弥吉 馬場章子 斉藤隆才 関 森 久 樫木平治 栗原ウタ 程島房治 福田守夫 奥富ふじ子 矢島健三 沼田象三郎 斉藤秀次郎	室岡 勝 岩沢 昭 大塚 敬 浜野 千三 三角 たき 岸 伝夫 時本 和 内藤 真肇 山本 政 今井 守男 綱代 三郎 鈴木喜三郎 肥田繁雄 安田清次郎 渡辺 紀子
56年						
57年						
58年			60年			

資料を寄贈いただき厚く御礼申し上げます、61年以降は次号以降でご紹介いたします。
御寄贈いただいた資料は、今後「収藏品展」等でご紹介させていただきます。

利用状況

月	一 般			団 体			共 通				そ の 他		合 計
	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	大人	学生・生徒	児童	他館購入	招待	免除	
4月	9,507	854	1,998	579	461	13	1,531	124	180	3,382	280	1,838	20,747
5月	8,315	807	1,542	993	82	126	3,396	415	465	3,685	338	7,912	28,076
6月	3,112	218	485	499	0	0	1,066	32	73	1,472	154	7,507	14,618
7月	3,320	269	694	346	33	15	1,006	64	86	1,281	89	2,373	9,576
8月	4,424	842	1,069	200	0	52	1,052	193	190	1,568	154	1,037	10,781
9月	4,077	285	613	766	4	28	1,036	78	129	1,589	232	2,112	10,949

発行日 平成2年10月31日

発行 川越市立博物館
〒350 川越市郭町2丁目30番1号
TEL 0492-22-5399